

小規模産地における輪ギク生産技術の経営的評価

高島俊介 (佐賀県農業試験研究センター)

Shunsuke TAKASHIMA : An Evaluation of Standard Type
Chrysanthemum Producing Technologies at Small Scale Production Area

1. はじめに

佐賀県のような輪ギクの小規模産地では、共同育苗や共同選花等の分業化はコスト的に困難であり、家族労働力を基礎とし、地方市場出荷を前提とした経営が中心となっている。しかし、輸入挿し穂の導入や共選 共販の開始 (1995, 5戸による, 現在 2グループ) 等, 佐賀県でも新しい動きがみられつつある。そこで本稿では、施設型輪ギク生産技術の基本的性格を明らかにし、近年、大産地で導入が図られつつある新技術を取り上げ、小規模産地における経営への導入可能性を検討した。

2. 経営モデルの概要

苗生産 選花 出荷を分業化した夏秋キク‘精雲’+秋ギク‘秀芳の力’+二度切りの周年施設生産を対象に、線形計画法を用いたモデルを作成し分析を行った。分析には農研センター開発の「CLPver5.34」を用いた。

モデルの作型を11プロセスに単純化、労働時間を2戸の農家調査等から週毎に標準化し、労働力は家族2名と雇用とし、雇用労賃は時間当たり1千円とした。

施設は加温、電照、遮光施設を装備し、取得価格7,160千円/10a、施設面積に応じた固定費となる。

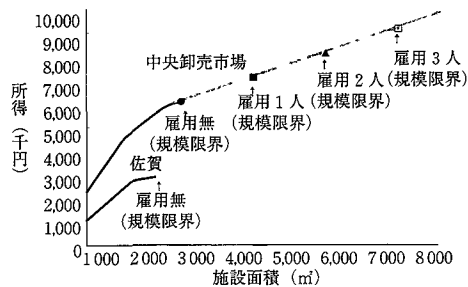
収量は36千本/10aに固定、単価は農林水産省統計情報部「花き卸売市場調査」の中央卸売市場平均および佐賀の月別卸売価格 (1997. 11 ~ 1998. 9) を利用した。

定植本数は摘心では15千本/10a、無摘心はその3倍とし、親株からの育苗は行わずに定植用穂を全て購入 (8円/本)、出荷は共同選花と農協共販を想定した。

3. 分析結果

1) 慣行技術の基本的性格

苗生産 選花 出荷の分業化を前提にした慣行技術の規模限界の推定を第1図に示した。10円程度単価の高い中央卸売市場出荷の場合、施設拡大と雇用増加に伴い、ほぼ直線的に所得が増加しており、慣行技術は、資本



第1図 出荷市場別の所得の推移

労働の多投入により高所得を上げていくことが可能な特徴を持っている。一方、県内出荷の場合は雇用を導入せず家族のみの経営が最適となったが、低所得しか得られず、分業化のメリットを享受できていないと考えられる。

2) 夏秋ギク‘精雲’の無摘心栽培技術の経営的評価

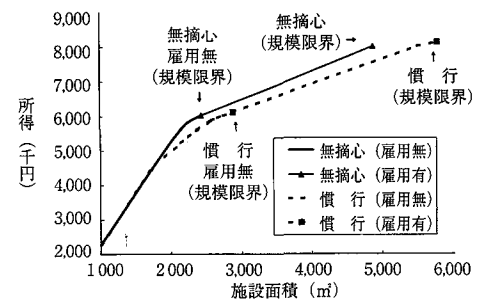
‘精雲’の無摘心栽培は、単価向上と2週程度の栽培期間の短縮という長所があるが、労働時間や費用増加という短所も持つ。そこで、分業化、中央卸売市場出荷を前提とし、雇用労働力無しと2名の場合について、‘精雲’の摘心栽培を無摘心栽培にかえたモデル (無摘心モデル) の規模限界を推定した (第2図)。なお、‘精雲’の単価10%増加を想定している。

慣行モデルの限界施設規模5,782m²、所得8,130千円に対して、無摘心モデルでは限界規模4,886m²で8,017千円の所得が得られ、ほぼ拮抗する所得で約900m²の施設節減が可能である。“これから”の経営が多い小規模産地においては、初期投資をできるだけ抑える必要があるが、そうした点からすれば、無摘心栽培技術はより導入の可能性が高い技術といえよう。

3) 移植、防除、灌水の機械化、自動化の経営的評価

前節の無摘心モデルにさらに移植機 (野菜移植機改良型) を導入したモデルでは、限界規模は5,493m²と増加するものの所得はほぼ同等 (8,067千円) となった。また、防除と灌水を自動化する多目的細霧システム (DIK式) の導入モデルでは、やや所得が減少した (高温障害回避による品質向上=単価向上は考慮していない)。

これらの技術は、快適性という点で大きなメリットを有するが、所得的なメリットは小さい。輪ギク経営がさらなる展開を図ろうとする際に対象となる技術として位置づけられるのではないだろうか。



第2図 ‘精雲’無摘心による所得の推移